

お話し大好き
家族の時間



池田小百合

文芸社

娘たちに贈るまえがき

私は、ひとりっ子である。

ひとりっ子には、あまりよいイメージがない。

たとえば、わがままである、じゅうぶん自立していない、他人とうまくつきあつていくことができないなど。これらは全て、私に当てはまつていくような気がする。

両親が晩婚だったため、私ひとりを産むのがやっとだったそうだ。

さらに、身長が低い。一四五センチしかない。

小さいこともマイナス・イメージである。何をするにも余裕がない。高い所には届かないし、力はない。力仕事で役に立つことはほとんどない。チビ、役立たず、なにをさせてもまともにできないと批難されながら育つ

た。

そして、女である。これもマイナスである。

現在は女子の社会進出が評価されるようになり、男女別姓論も強いが、私が勤務していたK女子高校には出産休暇も育児休暇もなかった。結婚して出産を迎えた女子教員は自動的に退職しなければならなかった。結婚し

ひとりっ子の女子となれば、結婚に当たっては婿養子を取ることが第一である。

そうしなければ、家名が断絶してしまう。母も婿養子を取っていた。

ところが、様々な事情から、私は嫁に行くことになってしまった。嫁に行くといっても、夫の実家に行くわけではなく、夫が私の実家に来るので、私の姓が変わるだけのことだった。ひとつの家にあつたの表札、それは當時は珍しかった。

私の両親は一応の理解を示してくれたのだが、全面的に肯定してくれていくわけではないことはわかった。それが心の重荷になった。

さらに、冷たい世間の目というものがある。親戚でもないのに、「あらっ、お嫁に行かれたの」などと驚いた顔をされると、相手は正直な感想なのだろうが、落ち込むのである。わざわざ「お宅もこれでおしまいね」などと言う人もいて、近所を歩けなくなった。

出産予定で退職すると、私は家から外へあまり出なくなつた。

姓をなくし、仕事をなくし、世間体をなくし、生れてくる子どもに期待をかけた。男の子だったら、世間の目も変わるだろうとさえ思った。

ところが、臨月になつてもその子は生まれて来なかつた。体が小さいことがいけないのだろうか。おなかの中で大きく育ちすぎたのだろうか。元気に腹を蹴っているのに、どうして出て来ないのだろうか。初産は遅れる傾向がある、という本の説明を見て自分を納得させていたが、不安はつるばかりであつた。

とうとう予定日を十日過ぎたところで、夫の勧めもあり、医師に強く言つて、出産を促進してもらふことにした。陣痛促進剤を注射してもらい、

なんとか分娩できたその子は泣き声をあげなかった。女の子だった。

ヘソの緒が首に巻きついていて、下がれなかったということがわかった。分娩の時に、下がって来る勢いで、子どもは首を吊^つって、死んでしまった。生まれるための努力をしたことが、死因になってしまったのだ。

私は泣いた。この子だけは絶対に産みたかった。

こんなこともあった。妊娠の途中で診察のA医師に貧血予防の薬について「薬を飲んでも子どもに悪影響はありませんか」と質問したところ、A医師は突然怒り出したのだ。「オレが信用できないのか！」と大声で怒鳴られた。弱い立場の患者を、そんなふう^にに怒鳴りつける医師は最低である。私はA医師のいるその病院に行くのをやめた。夫も「あなたの判断が正しい」と言ってくれた。そして、B医師のいる病院に変えたのであった。そのB医師でも、私の子どもを救えなかったのである。

本当の悲しみはそれから始まった。

出産の日は、シヨックのため、何がなんだかわからなかった。

翌日、私は深い喪失感に襲われた。死産した私にとって、産科病棟はつらい所だった。となりの母親は乳飲み子に母乳をあげているのに、私には母乳をあげる子どもがいない。出産したので、母乳はどんどん出てくる。それをしほって、ただ捨てなければならぬ。なぜ、あの子は死んでしまったのか。どうすれば助けられることができたのか。妊娠中に胎児が元気だから腹を蹴ったと思っていたのだが、ほんとうは苦しくて蹴っていたのではなかったか。なぜ子どもの気持ち私にわからなかったのだろうか。

悔やんでも悔やみきれないのである。

退院してから、慰めてくれる他人の言葉が、どれも残酷に響いた。

「悲しいことは早く忘れなさい」「若いんだから、また産めばいいのよ」「助かって、脳に障害が残ったかもしれない」など。

この子どものことは、忘れたくない。子どもの死はそう簡単に忘れられるものではない。せっかく元気に生まれようと、あの日まで努力していた子どもに対して、私はなにもしてやれなかったのだ。

結局、有効な慰めの言葉はなかった。ただ耐えるだけだった。

私はなおさら引きこもる生活になった。買い物に出て、乳児を見るのがつらい。生きていればあの子と同じ年ごろだ、大きくなった、もうすぐ立つのになど、私の中では子どもはきちんと成長していくのである。

二人目の子どもを妊娠しても、悲しみは消えなかった。前と同じ繰り返しだが、かえって悲しみを深くした。そして、臨月が近づいてきた時、言い難い不安を持った。今度の子も産まれて来ない、この子も死んでしまうという不安だった。理由などないが、それは確信に近いものだった。

前とちがう病院に行った。夫がC医師に相談し、C医師は帝王切開することで、私の不安を取り除いてくれることになった。予定日が来ても、陣痛は起こらず、私はパニックになった。胎児の首にヘソの緒が巻いているかどうか、当時は外から診察することはできず、まったくわからなかったのだ。

帝王切開の結果、子どもが産声をあげた瞬間、私は泣いた。なぜ、泣い

たのだろう。うれしいのか、悲しいのか、わからなかった。涙が後から後から流れてきて、止まらなかった。男の子だろうと、女の子だろうと、どちらでもよかった。

私の子育ては、ここから始まった。

二年後、三人目の女の子を帝王切開で無事出産した。

この本は私の子育ての記録である。

私はこの本を、生きようと努力することで命を落としてしまった最初の娘に捧げたい。感謝をこめて。

もくじ

娘たちに贈るまえがき 3

五歳までの子育て 19



1 互いを思いやる姉妹

神様 25

料理 28

駅前食堂 32

街頭募金 34

歯医者 36

給食	40
通院	46
立体映画	48
服を着せる	52
名前書き	54
夢	58
家族の食事	61
忘れ物	64
テレビを消す	71
ボクってだれ	80
算数	82
諭吉の家訓	85
夜のおはなし	88
先生がね	89
玉子焼き	91
読書	95

海水浴 99

ごちそうさま 106

テスト 108

図工の楽しみ 109

サーカス 121

講話 129

買えないもの 131

女子高生 132

サワー 134

コンピューターゲーム 136

仲良し 139



2 お姉ちゃんは辛抱強い

中耳炎 143

福 耳 152

なわ跳び 154

十文字言葉 158

文字の書き方 160

お誕生会 161

宿 題 168

ドッジボール 170

ひとりで乗り換え 174

自 慢 176



3 妹は好奇心のかたまり

肉 食 179

交通安全指導 181

ババロア 183

観劇	185
入学式	187
逆上がり	190
散髪	197
帰りの会	203
アサガオ	204
おつり	209
食事の支度	210
『お』のつく言葉	213
鬼のような母	215
川原の石	216
カタカナのおけいこ	218
お父さんの仕事	219
風邪をひかない方法	222
床屋さんにて	223
ミイラ	227

トルコ	カッパドキア	池田磨実より葉書	229
トルコ	大地震		230



4 夫のユニークな子育て論

幸福	237
勉強	238
猫が空を飛んだ	241
父親の役目	242
夫はこんな人	244
古いTV番組	245
憧れた人	247
食事は楽しく	250
ワープロの訓練	251
間違い	254

ゴルフ場	255
老後	256




5 どんどん丸くなる私

ブタはきれい好き	263
いなくなった人たち	266
買い物をする男	269
家出と自殺	270
栗の木	273
母親	274
退院の日	275
太る	277
ウォークマン	280
戦争を知らない子どもたち	283

終戦の日の記憶	288
車椅子	292
ドナーカード	293
子どもに言葉を	294
つくしとスギナ	295
子育ては親の責任	297
白い花の悲しみ	299
御殿場線にSLを	300
ゆっくり たっぷり	302
夢を飛ばす	303
童謡を歌おう	305
童謡の歌詞の勘違い	306
挨 拶	311
世界のオザワ	313
軍 歌	315
かしわ哲さん	316

島倉千代子さん	317
小川うたさん	319
あとがき	322

五歳までの子育て



この本には、娘たちが〇歳から五歳までのことを、ほとんど書いていない。五歳までは、子どもの世話にかかりつきりで、文章を書く気持ちの余裕がなかったからである。

せつかく元気に生まれてきた子どもを健康に育てよう、病気をさせないようにしようというのが、私の目標だった。勤めを辞めた私は、子どもの世話に専念できた。赤ん坊には、しょっちゅう触れるようにしたし、抱いてあげたり、言葉をかけてみたりした。赤ん坊の言葉そのものは理解できないが、その意味を理解することはできる。意味が理解できれば、話しかけることはできる。親には赤ん坊の言葉を理解する不思議な能力があると、自信を持つことが大切なのだ。



また、下痢を防ぐために、冷たい生水は飲ませなかった。水を欲しがったら、必ず湯ざましを与えた。

歩けるようになってからは、大人がそばについて歩かせた。乳母車に乗せたこともあるが、動きを制約されるのがイヤなのか、子どもは乳母車の中で立ってしまい、結局二回しか使用しなかった。小さいころは、自動車に乗せたことはない。最近、推奨されているチャイルド・シートは、本末顛倒だと思う。本来、幼児を自動車に乗せるべきではない。

私の家は三世代同居家族なので、子どもを外へ連れ出して遊ばせることは、私の父が毎日やってくれた。おかげで、子どもたちは、夜はぐっすり眠り、夜泣きされて困ったという経験は一度もなかった。

特別な離乳食は作らず、大人の食べているものをいったんよくかんでからスプーンに出して与えた。簡単に流動状になるし、人はだに温まるし、唾液で消化されるし、手間はかからないし、いいことづくめである。昔の母親はみんなこうしていたのではないか。



おしめが取れるのは、早かった。紙オムツはまだ高価だったので木綿のおしめを使っていたが、木綿のおしめは濡れると気持ちが悪い。子ども自身がイヤがって、早くこれを取りたがった。子どもは親の排尿・排便を見学したが、真似したがって、アツという間にやり方を覚えてしまった。毎日何十枚というおしめの洗濯は大変だったが、そんなわけで、大変な時期は短期間で終わってしまった。

夏は、可能な限り裸で遊ばせるように心がけた。冬は、肌着に気をつけた。暖かくて、濡れても冷えないウールの肌着を着せようと思ったこともあったが、子ども用は販売していなかった。そこで、汗をかいたら、すぐに取り替えるようにした。

周囲に自然が豊かなことはよかったと思う。子どもたちは池での水遊びや泥遊び、木登りが大好きだった。隣家の裏が、春は一面の菜の花畑になり、夏は牛の飼料用のトウモロコシ畑、秋は空き地になって、毎日、そこで遊ばせることができた。また、一步、外に出てまわりを見回すと、富士



山や丹沢山地、足柄山や箱根連山が見えた。
保育園に行くまで、二人ともほとんど病気をしたことがなかった。

1 互いを思いやる姉妹

姉の悠実が小学校二年生、妹の磨実が幼稚園の一月から
書いたいくつかの印象記。

四月から姉は小学校三年生、妹は小学校一年生。



白い花が好きです

一年は、白い花で始まる。

コブシ、ハクモクレン、ハナミズキ・・・

見上げれば、きらきらと光が立ち上る。

その上には、真っ青な空が広がっている。

白い花は、好きな花。



神 様

駅前一片すみ。木枯しの中で、忘れ去られたようなお地蔵さんがある。悠実と磨実は、通るたびに手を合わせる。

「おかあさん、五円貸してくれる？ あとで返すから」

妹の磨実が私の手から五円を受け取る。

さっそく、さい銭箱に向かって放り投げ、小さな手を合わせ、頭を下げ
何事か祈った。

姉の悠実は百円を入れた。

「悠実は、なぜ百円も入れたの？」

「だって、五円がなかったんだもの。今度の時に、おさい銭をあげないで、お祈りすれば同じだよ」

「神様もお金が好きなのかなあ？　ボクたちがお金をやらないと、望みをかなえてくれないんだね」

「麿実は何を頼んだの？」

「走るのが速くなるようにサ。ボクはいつもビリだから」

「速くなるといいね。でも一番がいれば、だれかは必ずビリになるものですよ。いいじゃないの、ビリだって。悠実は何を頼んだのかな？」

「秘密だよ。百円もおさい銭あげたから、いくつも頼んだよ。効き目がきつとすごいよ」

「神様ってサ、お金持ちかな？」

「百円ぐらいやらなければ、お金はたまらないよ。でも、百円もやって、もったいなかったかな？」

「おかあさんは、なぜ神様、拜まないの？」

「神様を信じていないもの。神様が本当にいて助けてくれるなら、最初の赤ちゃん、死んでないでしょう？」

「五円じゃ、『命』とかの難しいのはダメなんじゃないの。でも、簡単な
『あした、晴れになるように』とかなら、かなえてくれる時もあるよ。」

ボクは神様はいるって信じているよ」

「ボクもさ」

お地蔵さんの前を通るたびに、娘たちは手を合わせ、しきりにお願い事
をする。

悠実はそのたびに繰り返し、

「前におさい銭を百円やったことがあったよね」
と言うのである。

(二九八七年一月記)



料理

今年の四月から悠実は、小学校の三年生になる。

磨実は、小学校の一年生になる。

「今年は自立の年。自立していく上で一番大切なことは食べることだ。今年には料理教育をしてあげる」

と、私は張り切った。

しかし、私の小学校時代は即席ラーメンと粉ジュースが大流行した時代だった。どの家もダンボール箱で即席ラーメンを買い、玉子を入れて食べた。

粉ジュースは後日、発ガン性が問題となり、販売されなくなった。当時

は水に溶かさずに、なめたりしていた。メロンやパイナップルの味がして、おいしかった。

だから、子どもたちに伝えられる味などあるわけがない。

そうだ。料理ごとに物語をつけてみよう。

まずはツミレのお吸物の物語。

「これは、オリンピック世界チャンピオンの柔道の山下選手が、毎日食べていたものです。おかげで山下選手は金メダルを手にすることができたというわけ。まあ、いわば山下のツミレですね」

「なるほど」

特別なものではない。イワシのすり身をダンゴにして吸物に入れるだけである。

悠実も磨実もダンゴ作りを喜んだ。吸物の汁の味見もした。

「おいしい」

「ちょうどいいオ・ア・ジ」

磨実は大人の料理人のような得意顔をした。

「いただきます」

「山下ってだれなの？」

娘たちは山下選手が活躍したところを見ていなかった。

夫がほそつと言った。

「山下はツミレを食べただけで強くなったわけではないだろう」

「それはそうですが」

ひと口食べて、磨実が言った。

「ウワア、まずい。犬のエサだ」

最初はりきっていた私は、これですぐにメゲてしまった。

白雪姫の「焼きリンゴ」、ピーターパンの「チョコケーキ」も予定して

いたのに。

図書館に行つて、料理の本を探してみた。西村玲子著『ロンロンママの子ども料理教室』。なんのことはない。これを見て同じように作ってけば、おいしいものができた。

最初にやった『ナゾナゾイカ』（イカのリングあげ）が大成功。これで味をしめた。

膾炙は、お友だちが来たと言つては、本を見てピザを作つた。

悠実は、スペイン風ぞうすいを作つた。

私は、ただただ、おいしいと言つて食べるだけとなつた。

（一九八七年一月記）



駅前食堂

食堂に行くといろいろな音楽が聞こえてくる。ほとんどが演歌だ。

シヨパンやモーツアルトが聞ける店はあまりない。静かに食事したいのに「音楽が流れていない場所」もない。

しかし、あつた。静かな食堂が。駅の立ち食いソバ屋だ。娘たちが言う。「早くて、うまくて、安いから、いいね」

きつねうどん、たぬきそば、山かけうどん、山菜そば、二百五十円。カレーとたぬきそばのセット、四百五十円。メニューもいろいろある。

食券を出す。とたんに湯気のたつたドンブリが目の前に出てくる。日曜日の五時半ごろは客がない。私と娘たちだけだったりする。

膾炙はきつねうどん。私はカレーとたぬきのセット。悠実はなかなか決

まらなくて食券販売機の前で迷っている。

「山菜ソバってどんなの」

「何だろうね。山菜がのっているソバかな」

「三歳までの子が食べるソバなんじゃないの」

磨実の言った言葉に、店のおねえさんが吹き出した。もう一人のお店の
おばさんも笑い出した。私も、悠実も磨実も、みんな顔を見合わせて笑
った。

駅の立ち食いソバ屋は、静かで、気楽で、早くて、うまくて、安い。

(一九八七年一月記)



街頭募金

駅前で、いろいろな団体や個人で、募金箱を持った人を見かける。

赤い羽根、緑の羽根の募金。アフリカの子に、カンボジア難民に、ベトナムに。水俣に、広島、長崎に。

寒空の下、口ぐちに「お願いします！」と、叫ぶ。

ほとんどの人は、通り過ぎる。

悠実と磨実は、サイフの中の一円、五円、十円を募金箱に入れに行く。

募金箱を持った人は、この小さな子どもにも、深々と頭を下げ、お礼を言う。それを眺めているのは気が引ける。

歌手の美空ひばりが、百万円を寄付するのを、テレビで見たことを思い

出した。

もどつて来た娘たちに、

「何かで大儲けするようなことがあったら、その時は、たくさん募金してあげてね」と言う。

「街頭募金には、恵まれない人の所に行くまでに使われてしまい、使いみちのわからない金になっているものがある。だから、はつきりしない所での募金は、しないほうがいい」と夫が言う。

たぶん、そんな募金もあると思う。

でも、それならそれでいいと思つて募金をする。途中でネコババした人も、恵まれないかわいそうな人だからだ。

水道からは、美味しい水がすぐに飲める。スイッチ一つで明るい電灯が

つく。一つの鍋を囲み、笑いのある家庭。これが幸せだ。この幸せを、わけてあげよう。

私は、いつもそう思って、ささやかな募金をする。

(一九八七年二月記)



歯医者

「歯医者に行くから、お金と保険証を出してよ」と、悠実が言う。

時間があるので、私も一緒に行くことにした。

身仕度をする。毛糸の帽子をかぶり、メガネをかけ、マスクとえり巻きをして、ジャンパーを着る。セーターとズボンとブーツ。

「さあ、行きましょう」

「自分だけで行くよ」

「たまにだからつきあつてやるよ」

「おかあさんが、そのかつこうじゃ、いやだよ。自分で行つて来るよ。合言葉は『車を見たら死ぬと思え』だろ。わかつているよ」

自転車をこいで行つたと思つたら、三十分もしないうちに帰つて来た。

「先生が『アーンと口を開けて』と言つたから、口を開いた。とたんに抜いて、薬をつけて、もう一瞬のうちに終わつちやつたよ。すばやかつた」
悠実はしきりに歯医者を誉めて、おおいに感心しきつている。もらつて来た歯は勉強机に飾つた。

「歯医者のコップは面白いよ。水がいっぱいになると自然にカタンと止まるの。面白いから何回もやつちやつた」

痛い目にあひに行つたのに、ずいぶん余裕のあることだと思つた。

磨実も一人で歯医者に行く。

ある日、治療費が二千八百六十円だったのに、お金が二千円しかない。さあ困った。

「まだ治療が終わっていないから『お金は来週来る時でいいですか』って言ったら、『いいです』って言うってくれたよ。お母さん、ダメじゃないか。今度から三千円ぐらい入れてね。ハジをかいたじゃないか」

「歯医者に一人で行くなんて、怖くないの？」

「ぜんぜん。痛くないし、へっちゃらだよ」

二人とも、歯医者は一で行くものだと思いついでいる。

私は小さいころ、駅前歯医者に、母に連れられて行った。

「痛くするな！」と、泣きわめいた。

薬臭い診療室。石炭酸の臭い。白衣の先生や看護婦さん。ガーガーいう

機械。どれも怖かった。いやだった。逃げだしたい。まだ何もされていないうちから、泣きわめき、まったく治療をせずに帰って来た。

帰る道で、母に叱られて、ますます歯医者が嫌いになった。

中学の時、私は学年で一番小さかった。ある日、一番背の高い子が、

「あなたは小さい時、歯が悪かったでしょ。歯が悪いとよくかめないから小さいんだ」

と言つて、自分の歯を見せてくれた。白いきれいな歯が並んでいた。

悠実と磨実には食後に歯をみがかせている。小学校では、給食後に歯みがきの時間が設定されていない。

歯ブラシを持って行かせると、

「学校に、そんな物、持って来たらいけないんだよ」

とみんなが言つて来るそうだ。

二十年後、悠実と、みんなの菌は、どうなっているだろうか。

(一九八七年二月記)



給食

悠実が幼稚園の時、給食を全部食べると、『おたよりノート』の今日の日付に花マルがもらえることになっていた。悠実は、いつも花マルで、帰宅すると、おばあちゃんに見せていた。

私の母、悠実にとってはおばあちゃんは、

「給食は、添加物の固まりだから、全部食べたらいけないよ。真つ赤なウインナも、平気で食べさせる。親も先生も『消費者レポート』を読んで自然食品の勉強をしてもらいたい」

と言って顔をしかめた。

ところが、悠実には給食が大好きだった。幼稚園から帰ると、給食の話ばかりしていた。

悠実がそれを聞いて、

「ボクも、給食を食べてみたい」

と言うので、幼稚園に一年間だけ行かせた。

この一言がなければ、悠実には幼稚園に行かせないつもりでいた。保育園も幼稚園も、悠実の時に、こりこりだった。

悠実は、給食を食べるに、幼稚園に行くことになった。

悠実も給食が大好きで、

「一番に食べ終えた」「おかわりをした」「同じのを作ってくれ」と、せがんだ。

私に、そんなすごい料理ができるわけがなく、困り果てた。

小学校から、給食についてのアンケートがきた。もちろん「とてもおい

「しい」とか、「喜んで食べる」とかにマル。最後に「給食費は、高いか」の欄には、「安すぎる」と、書いた。

今、外食をすれば、四人で八千円ぐらいになる。それなのに、給食費は、一人一カ月三千六百円だ。

娘たちがのぞき込んで、変な顔をした。

給食費はもつと高くして、よい品をメニューに入れてもらいたい。

悠実が保育園の時、五、六人の子がまだ食べ終えなくて、ベランダで食べていた。大きな唐揚げが残っている子。ポテトサラダが残っている子。ミルクが残っている子。

悠実も年少児にまじって、残されていた。中耳炎の薬を飲んでいたところで、食欲が出ないのだ。

先生は、イスを上げて、その下を、ほうきでパツパツと掃いていた。時々、「早く食べなさい」「よそ見をしないで食べなさい」「おしゃべりを

しないで、どんどん食べなさい」と、声をかけていた。

保育園の若い先生は、食事の速い子の隣に遅い子をすわらせ、いくつかのグループを作って競わせていた。それは、何の意味もなく、速い子が、遅い子をののしり、いじめる結果になった。そうなるであろうことは、初めからわかっていたことだろうに。子どもを保育するには、あまりにも若くて、経験不足だった。

悠実は、いつものろくて、やっと食べていた。

私は情けなかった。悠実を抱きしめて泣いた。保育園に入園させたことを、とても後悔した。

後日、悠実は小学校二年生の夏に中耳炎が完治した。何のことはない、しだいに食欲が出て、一番最初に食べ終え、おかわりをして、みんなや先生を驚かせた。

「給食がきらいで、登校拒否をおこした」という話を聞く。

給食がきらいな理由はいろいろである。

母親が、とても料理が上手で、おいしい物を次々に作ることができたら、安い給食は、子どもにとって、たいへんまずい食事になる。

私のように、料理がまるでだめな場合は、給食は、めずらしくて、おいしい物ばかりで、毎日が『お楽しみ給食』になる。

母親の作る物よりまずい給食を、だれが食べるだろうか。全部食べると言う方が、おかしい。

実は私は、小学校の六年間給食を全部食べたことがなかった。小さくて、食も細かったのだ。

コッペパンは、私には大きすぎて、半分食べるのがやっとだった。食べても食べても、まだまだ長かった。脱脂粉乳のミルクは、焦げ臭くて人間の飲み物とは思えなかった。

私のクラスにも、肉やトマトのきれいな子はいた。しかし、別に、どうと言うこともなく、残された記憶もない。その時は、給食を食べなくても平気だったが、後日、一番小さくて、ひ弱で、頑張りがきかないことがわかった。給食は全部食べる方がよかったのだ。

現在の給食は、おいしい牛乳なのだそう。いつから、脱脂粉乳のミルクはなくなつたのだろう。鼻をつまんで飲んだその味を、今でも覚えてい
る人は多いだろう。

あのころは、貧しくて、ひどい給食だった。大変な時代だったのだ。

(一九八七年三月記)



通院

家の前に、病院ができた。

悠実も、磨実も、カゼぎみになり、二人で病院に行くことになった。

「悠実は、クシヤミ、ハナミズ、ハナヅマリです。と言うんだよ。磨実は、ノドが痛くて、ハナミズが出ます、熱はありません。と、言うんだよ。じゃあ、言うことを練習してごらん」

「クシヤミ、ハナミズ……だいじょうぶ言えるよ」

「忘れた、何て言うんだったっけ」

「じゃあ、紙に書いてやろうか。紙は、どこだっけ」

とワイワイやっていると、

「よけいなことをするなよ。小学生なんだから言えるよ。自分の体のこと

なんだから、自分で言わせろよ。僕は、小学生の時鼻が悪くて、一人で歩いて耳鼻科に何年も通院していたんだ」と夫が言った。

ピアノ教室に来ている六年生の男の子が、

「病院には、お母さんがいつもついて来て先生と話す。自分で行けないこともないけれど、一人で行ったことがない。……」
と言っていたのを思い出した。

二人は、お金を二千円ずつと、診察券を持たせてやると、勇んで出かけて行った。すぐ、何種類ものクスリをもらって、ニコニコして帰って来た。
「悠実ちゃんの方の二千円で、おつりがきたから、ボクの二千円は使わなかったよ」

「おなかも、診^みてもらったよ」

私は、いろいろ心配し、そのうえ夫に叱られ、まったく損をした。

(一九八七年三月記)



立体映画

東映マンガまつりに行った。

入場の時に右が青、左が赤のセロハンのメガネをもらった。

映画が始まるとオバケのQちゃんが言った。

「みんなメガネを持っているかい。それをかけて見てね」と。

会場中の子どもが一斉にメガネをかけた。

スクリーンが立体的に見える。

水道の水が迫って来た。お父さんの振り回す物干し竿の先端が観客の方に来たりする。そのたびに、みんなが「オー！」とか「ヒャー！」と、どよめく。

画面が飛び出して来る。迫力満点だった。

帰宅して、色メガネをかけながら歌の本の表紙を見た。

赤とピンクのウサギの絵が見えなくなるのに気がついた。青い方で見たり、赤い方で見たりするたびにウサギが消えたり、出たりする。

「すごい、すごい」

赤エンピツと青エンピツで絵を描いてのぞいて見た。

花を赤で、チョウを青で描く。見る色によって、花が消えたり、チョウが消えたりする。

悠実も、磨実も、大喜びし、夢中で遊んだ。

絵を描いては、

「消えた」「見せて」

「面白い」「今度の方がいいよ」と、春休み中やっていた。

商品にもなっていた。

タカラの『星のシンデレラ、リカちゃん』。リカちゃん人形の、おまけの一つに『星のメガネ』がついていた。お話のページのリカちゃんが立体的に見えた。星の国にいる動物の絵を片目で見ると、変化するように描いてある。

小学一年生用の教育教材には『変身窓』があった。

上の窓には青で「医者」の絵、下の窓には赤で「石屋」の絵が描いてある。上に青セロハンを重ねると「いしや」が消えて「いしや」の文字が出る。

「かしゃ」と「かしゃ」、「おもちゃ」と「おもちゃ」、「びょういん」と「びょういん」など。

三年生用の教育教材にも『ミラクルシート』があった。

ハガキの大きさのチェックカードに説明文が青インクで書いてあり、答えや大切な文が赤インクで書いてある。赤ゼロハンを重ねると答えが見えなくなってしまう。

悠実も、磨実も、夢中で遊んだ。

家庭訪問でみえた先生や、ピアノ教室の生徒にも教えてあげた。近所のお母さんたちにも話した。だが、期待した反応は、返って来なかった。

悠実も、磨実も、こんなに楽しく遊んだのに。

(一九八七年三月記)



服を着せる

「お母さん、裏がえして」

と悠実がセーターを私に渡した。

「自分でやりなさい！」

と夫が声をかけた。

悠実には、小さいころから、何でも教えた。ボタンをはめるのは、なかでできなかった。何度も練習をさせて、できるように頑張らせた。

悠実は、そのたびに泣いた。

磨実には何も教えなかった。ボタンが止まっていなくても、ほうっておいた。

気がついた時だけ、

「マミちゃん、だらしないよ」

と言って、ボタンをはめてやった。

いっしょうけんめい教えた悠実も、何も教えなかった磨実も、幼稚園にあがるころまでには、なんなくボタンかけができるようになった。

ひらがな、カタカナ、漢字の読み、その他、何でもボタンのケースと同じになった。

(一九八七年四月記)



名前書き

藤原マキ著『幸せって何?』（文春文庫）を読んだ。

マキさんの長男・正助君が、幼稚園に行く支度を両親でするところが出てくる。靴や下着に名前を入れたり、雑巾を縫ったり、袋物類を作ったり、ミシンがないので手縫いで、ご主人のつげ義春さんも手伝って作り、傑作な袋を縫って夜が明ける。

悠実が、初めて保育園に行く時も、同じだったのを思い出して笑ってしまった。

パジャマ入れ（縦三十センチ、横二十五センチの袋。口に紐を通しキュツと引けるように）、雑巾三枚、防災頭巾、布のバッグ、上履き入れ。

作り方がびっしり書き込まれた紙が配られた。全ての物に名前を書く

(直接でなく、長方形の布を縫いつけて、それに書く)。

保育園では、お昼寝がある。パジャマや、布団にも、夫が一つひとつ名前をペンで書いた。私は字が下手なので、夫に頼んだのである。

幼稚園では、保育園の物を使った。

けれども、ナプキンや、ランチョンマット、お手ふき、コップ入れ、お道具入れ、雑巾などの、作り方が書いてある紙が渡された。布のバッグの大きさが、保育園の時より少し小さいので、また、作り直した。

磨実の時は、悠実の物を全て使うことにした。

長方形の名前の布を外して、今度は私が下手な字で、直接サインペンで名前を書き込んだ。防災頭巾には、カバーをつけず、特に大きく太く書いてあげた。下着や、クレヨンにもサインペンで直接書いた。

磨実の幼稚園へ行く支度は、ほんの五、六分で終わってしまった。

小学校への持ち物は、幼稚園の時の物で間に合わせた。

悠実は自分で教科書や下着、クレヨンや、ピアニカ、算数セットなど、ひとつひとつにサインペンで直接名前を書いた。悠実は自分でやったので、午後いっぱいかった。悠実は、喜んでやり、私は、とても助かった。

一番大変なのは、体育着のゼッケンだ。

夏の半袖が二枚、冬の長袖が二枚、ゼッケンは、上着の前後に名札をつける。それに、大きくクラスと名前を書く。これが二人分だ。

私が縫いつけて、夫が、それにクラスと名前を書き込む。

「あと何枚だろう？」と言いながら仕事をする。

「お母さんは、お裁縫がじょうずだね」

と磨実がのぞき込んで言う。

磨実は、小学校で使う物は、全て悠実の物でいいと言ってくれた。

「じゃあ、名前だけでも書き直したら」

と言うと、すぐに、サインペンで黒く塗ったり、消えかけている名前の上に、自分の名前を濃く書いたりしたけれど、すぐに、「悠実ちゃんの名前のままでもいいや、わかるもの」と言つてやめてしまった。

名前は、わかればいいし、小物は、どんなでも使えればいい。

昔は、青空に字を書いた。

毎年、春になると、この作業を、夫と、夜遅くまでする。

娘たちのことを話題にするのに、必要な行事なのだろう。

(一九八七年四月記)



夢

近所のマーケットで『僕の夢・私の夢』というテーマで、絵のコンクールの募集があった。

「描いてみたら」と磨実に言うと、

「夢なんて見たことないもの。ボクは、いつもぐっすり寝ちゃうよ」

これには困った。

「大人になってなりたいものの絵でもいいでしょう」

「看護婦だけど、難しくくて、そんなの描けないよ」

「じゃあ、お父さんが話してくれた、コロボツクルの小人の国の絵にした
ら」

「アア、それなら簡単」

すぐに、あじさいの花の中に、五、六人のコロボツクルが遊んでいるところを描いた。

大人になつたら何になるか？

磨実の夢は、いろいろ変わる。

悠実と、磨実が話をしている。

「お花屋さんになりたい。きれいだし、楽しそうだし」

「お花は、すぐ枯れちゃうよ。それに、売れないこともあるよ」

「そうか、それなら、ケーキ屋さんがいい。おいしそうなを作って、面白し」

「ケーキだつて売れないと、あと、残つたら困るじゃあないの」

「そうか、それなら看護婦がいい」

「注射するんだよ。むずかしいカルテも読めないといけないんだよ。看護婦は、頭がよくないとダメだよ」

「そうか、それなら、スチュワーデスがいい。いろいろな国に行けるし、空が飛べるし」

「飛行機が落ちたら、一番に死ぬんだよ」

「そうか、それなら、バレリーナがいい。森下洋子さんに教えてもらいたいな」

「足が曲がっていたりするとぶたれるし、トウで立つとマメがつぶれて、血が出たりするんだよ」

「痛いのは、やだね。それじゃ、何がいいかな」

「磨実は、体育も得意だし、図工もうまいし、ピアノも弾けるし、本もよく読めるし、スイミングもできるし、料理もできるし、作文もまあまあだから、小学校の先生がいいんじゃないの」

「ウン、それがいいかなあ」

「悠実ちゃんは、いいなあ。フルーティストになるって、もう決まっています」

「花束みんなで持って来てね。すごいドレスも買うんだよ。いいだろう」

子どもの頃は、夢が、たくさんあったほうがいい。

それが現実と出合うたびに、くだけていってしまうのだけれど。

夢は、いつも心の中に広げていてもらいたい。

(一九八七年五月記)



家族の食事

毎回、歌を二曲歌ってから、食事をする。

おかずのことや面白かったことなどをワイワイ話しながら食べる。

「先生の好きなものは虫で、嫌いなものはオナラの匂いだって」

と、磨実が言う。

「子ども会の廃品回収があった。またギックリ腰にならなくてよかった」と、私。

「クラスに肥満の子がいて、みんながデブ、バカと言う。ボクはそんなことと言わない。でも、デブと言っている子が、クラス委員に選ばれてしまった。ボクのクラスは、これでよいのだろうか？」
と悠実が言う。

「高校の生徒が『奥さんは、美人か？ 可愛い人か？』と聞くから、『美人だと言われてみたいなあ。可愛い人だと言ってほしいなあ』と、いつも言っていると、答えておいたよ」

と夫が言う。

「なぜ食事の前に歌うの？」

と悠実が聞いた。

「お父さんがインドネシアに行った時、ジョグジャカルタの小学校の生徒

がいくつかの遊び歌をやってくれてね。お返しに『むすんで ひらいて』をやって喜ばれたそうよ。そのことをピアノ教室の生徒に話したら、『むすんで ひらいて』を知らない子がたくさんいるのね。テンポの速い現代曲もいいけれど、昔からある歌を、食事の前に、みんなで歌いたいと思うの』と説明した。

大井小学校が主催した、校医や栄養士を迎えての、昭和六十二年度第一回学校保健委員会報告書『子どもの健康生活を考える』の中に、「(給食について)給食時間が少ないので、残すという子が多いが、食べる時間は、二十八分ある。おしゃべりの多い子が残す傾向にある。学校でも、給食指導の時間を設けて指導しているのだが、家で食事をする回数の方が多いので、家では、おしゃべりをせずに食べるように、声かけをしてほしい」と書いてある。これは奇妙な指導ではないか。



忘れ物

家での食事はみんなが集まる時だ。気のおけない家族のお祭りである。おしゃべりをせず、もくもくと食べるように指導するのは、変ではないか。ワイワイ、ガヤガヤ、楽しく食事をしよう。何も悪いことはない。学校の給食の時間も、学校生活の一日の中で一番のお祭りのはず。みんなで楽しく食べよう。

我が家の食事は、たいしたおかずもないのに、一時間も続く。楽しく、うれしい時間だ。

この時間を、私はいちばん大切に考えている。

(一九八七年五月記)

その一

幼稚園へ持って行く物はずいぶんある。

カバン、帽子、歯ブラシ、コップ、ナプキン、テーブルクロス、上履き、おたよりノート、防災頭巾、絵の道具、粘土、はさみ、糊、兔の餌、水着。悠実には幼稚園の送迎バスに一人で行って乗り、通園していた。私はバスへの送迎をしなかった。

ある月曜日、いったんバス乗り場まで行った悠実は、走って家へ戻った。「だれも上履きを持ってないから、置いて行く」

「月曜日だから、上履きがあるんだよ」

また持って行くと、他のみんなは、お母さんがバスの所まで上履き袋を持って来ていて、乗る時に渡してくれたのだそうだ。

真相を知って、私は驚いた。

その二

磨実が上履きを忘れたまま幼稚園に行ってしまったことがあった。カバンだけ持って、側に置いておいた上履きを忘れてしまったのだ。

家に帰ってきた磨実は、泣いて抗議した。

「なぜ持って来てくれなかったの。幼稚園から『忘れたから持って来てね』って電話したじゃないか。みんなのお母さんは、ちゃんと持って来てくれるのに。上履きを忘れたのは、お母さんが、いけないんだゾー！」

「バカだな。お母さんが、上履きを持って行くと思っていたのか。そんなことしてくれるお母さんだと思っていたのか？」

と悠実が言った。

「上履きを忘れたら、裸足でいればいい。それが、恥ずかしいなら、自分で忘れないようにすればいいのだ」

と夫が言った。

磨実は、黙ってしまった。

その三

小学校に持って行く物もずいぶん多い。

ランドセル、教科書、ペンシルケース、ノート、下敷き、折りたたみの傘、体操着、ボール、縄飛びの縄、水着、図工の道具、習字の道具、理科の実験に使う虫眼鏡や温度計、ナプキン、マスク、テーブルクロス、歯ブラシ、コップ、給食の身仕度、掃除の身仕度、ピアニカ、健康観察カード、連絡帳、日記、自由帳、上履き、健康手帳、色エンピツ、コンパス、三角定規、めあてカード、提出物など。

忘れ物をしない方が不思議だ。

私は、寝るころになると

「時間割をそろえなさい！ 忘れ物をするとう、授業が受けられないでしょ」

と、毎晩怒鳴った。

「そんなことは自分の責任。それに、忘れ物なんてたいしたことじゃない。忘れたら、借りて間に合わせればいい。借りられなくて授業に参加できないければ『お客さん』をやつていればいい。他人に迷惑がかからないのだから、騒いでいる子より、いいじゃないか」と夫が言う。

その四

悠実が一年生の時の学校からのプリントにはこう書いてあった。

『忘れ物が多くなっています。親が、一緒にそろえてあげてください。』

二年の時には『忘れ物は、親の責任です。カバンの中を確認してください。』

三年になると『忘れ物をなくすように指導していきたい。』

家から学校へ持って行かせるのが親の責任なら、当然学校から家へ持ち

帰る物を忘れるのは、先生の責任になってしまふ。それでは、おかしい。忘れ物は、子ども自身の責任のはずだ。

悠実は土曜日のたびごとに、学校から持ち帰るべき物を忘れる。体操着や上履き、ナプキン、掃除の身仕度などを忘れる。

二年の運動会の前日も、持ち帰るべき体操着を忘れた。当日は、もう一枚の体操着を着て出かけた。

学校へ行ってみると、友だちがベソをかいていた。運動会なのにブルマーを忘れたのだ。学校に忘れたままになっていたブルマーを貸してあげた。忘れ物が人助けになってしまった。

悠実は忘れ物をした友だちに雑巾を貸したり、絵の具の筆を貸したり、折り紙を分けてやったりしている。

時々、友だちのお母さんに、「いつも悠実ちゃんに助けていただき、ありがとうございます」と言われた。ただ、学校に置き忘れた物を貸してい

るだけのことなのに。

いつも忘れて来るのだから、悠実のロッカーはゴミ溜めになっていることだろう。

その五

道了尊への遠足の時のこと。先生が

「おさい銭は、五円あげてもいい。お祈りは自由。勉強ができるようにとか、好きな人ができるようにとか」と、話された。

親向けの『遠足のしおり』には、その五円のことを書いてなかった。しかし、誰もおさい銭を忘れなかった。これはすごいことだと思う。

(一九八七年六月記)



テレビを消す

「今日は水曜日だから、七時から『ドラゴンボール』があるわよ」

「アッ。そうだった。忘れてた」

「あと十分で始まるから、そっちをかたづけたいらっしゃい」

「ハイ。先につけておいて」

しばらくして、

「なぜ、親が子どもにテレビを見ろなんて、言いに行かなければいけないんだ。ブツブツ」

と、夫がしぶしぶ二人を呼びに行った。

「先に見ててくれて。今日の題名も見ておいて教えてと言っていた」

「何をして遊んでいるの？」

二人は『かさこじぞう』ごっこをして遊んでいた。かさこじぞうになりきった悠実を、おじいさん役の磨実が、引っぱったり、押したり。テレビより、きつと面白いのだろう。

今日の『ドラゴンボール』は、ついに、夫と私だけで見た。

悟空が、レッドリボン軍の大佐と戦うところで、目まぐるしく場面が変わった。そのスピードについて行けなくて、私は、すぐに頭が痛くなった。子どもたちは、今は、テレビを一週間に二時間ぐらいしか見ない。それで学校に行っても、別に困らない。友だちと、テレビの話題が一緒に話せない仲間外れになるだろうとテレビを見せているのなら、やめた方がいい。テレビの話ができなくて、仲間に入れないような子がいるのなら、こちらから、その子とは、縁を切れればいい。

娘たちは、五歳ぐらいまでは、みっちりテレビを見た。

『ひらけポンキッキ』『マンガの国』『ピンポンパン』『おかあさんといっ

しよ』『できるかな』。午前中ほとんど全部と、午後四時頃から寝るころまで。

夫が帰って来て、

「またテレビを見ているのか。何時間見せているんだ」と、嘆いた。

テレビは、目に悪い。疲れる。じっとしているので、食欲がわかない。いいことはなかった。

しばらくすると、子ども番組はほとんど、合体変身物となった。

『ゴグル5』『ガンダム』『超新星フラッシュユマン』『電撃戦隊チェンジマン』『超電子バイオマン』。

ところが、この変身物は、回を重ねるごとに、残酷になっていった。悪人をピストルで撃つと、首が落ちて中から機械の部品が飛び出したり、目を撃つと、電気の火花が飛び散り、すさまじい音と共に爆発をして消えた

り、美しい女の人が本当は悪者で、剣で刺されたら血だらけになり、白い煙と共に、ポツポツのたくさんついた、恐ろしい怪獣に変身し、キエー、キエーと言いながら、襲いかかって来る。

悠実は、食い入るようにテレビを見て、身を硬くした。磨実は、私の背中につかまって、泣くようになった。

しだいに、このような番組をつけると、五分も正視してられなくなつて、自分たちで、怖いからやめようと言って、消すようになった。

近所の奥さんに話すと「ウチは、平気で見てるわよ」と言った。平気で見ている子どもと、平気で見せている親がいることが不思議だった。

テレビニュースも、子どもの自殺が相次いだ。葬式の場面や泣き伏す遺族が、大きく画面に映った。

母親が子どもを殺したり、身元のわからない女の人が林の中で発見されたり、子どもが誘拐されて殺されたり。ニュース番組も、だんだん見なく

なった。

お笑い番組も幅を効かせるようになり、テレビのほとんどがお笑い番組になった。芸のないタレントがさわいでいるだけだ。

歌謡番組も、聞くに堪えない歌手が出る。見ているほうが、ばかにされているようで、すぐに消した。

そして、ますますテレビを見なくなった。見なくても、何も日常生活には困らなかった。

娘たちが、一番熱心に見た番組は『Dr.スランプ』だった。

ロボットのアラレちゃんを見てみると、元気が出た。

最終回は、早めに夕食をすませ、椅子をテレビの前に並べて真剣に見た。アラレちゃんが「それではみなさん、バイチャー！」と言った。今までに

出たキャラクターの顔が、ぎっしりと画面に出た瞬間、悠実と磨実の二人は、ぼろぼろ泣いて、手をふった。

アラレちゃんは、いい友だちだったのだなあと思った。

私が小学生の頃は、ちょうどテレビが一家に一台普及し始めた時だった。相撲番組は、まだ明るいうちから放送されていた。どこの家でも家族全員で、せんべいや、みかんを食べながら、こたつに入って、柏戸と大鵬を応援した。

橋幸夫は『いつでも夢を』を歌い、三田明は『美しい十代』を、舟木一夫は『高校三年生』を歌っていた。

『ポパイ』もよく覚えている。

オリーブが洗濯をしている。洗濯物が揺れているのは、幸福の証だ。そこに、悪漢ブルートが登場。オリーブに迫る。

「ポパイ助けて！ 助けて、ポパイ！」

ポパイは、ブルートと戦う。ボコボコ殴られる。ハウレンソウの缶詰を食べる。とたんに強くなって、ブルートをやっつける。

「ポパイ強いよね。大好きポパイ！」

オリーブが、ポパイに抱きついてキスする。毎回同じだったが、楽しく見た。

最初からハウレンソウの缶詰を食べておけば、殴られなくてすむのにと
思った。

当時、テレビはめずらしく、大人も子どもも、熱心に見たものだ。大人は「テレビを消して勉強しろ」とか、「テレビばかり見ていて勉強をしない」などとは言わなかった。自分たちも、見たくてたまらなかったのだから。

他に娯楽がなかった。今とちがうところは、大人も、子どもも、同じ番

組を、一緒に見ていたというところにある。

テレビを見なくなつたその時間、悠実と磨実は、何をしていたのだろうか。悠実は、本を読んでいた。かこさとしの本が好きで、彼の本は、ほとんど読んだ。ファンレターも二度出して、返事をもらつた。かこさとしを知らない子がいるのは、残念だ。悠実は、いろいろな種類の本を読んでいるので、物知りだ。

磨実は、絵を描いていた。読んだ本の中の気に入ったカットの写し絵もする。それを、ハサミで切つて、紙人形（ペープサート）にする。その人形を使ってお話を作る。

一つの紙人形を磨実が持ち、一つは悠実が持つ。一つは私が持ち、即興でお話をする。

いろいろな物語の主人公の人形がまじっている。

『赤ずきんちゃん』『花さかじいさん』『一寸法師』『赤鬼』『ゲゲゲの鬼太郎』。

相手がどう話しかけて来るかを予想していないと、自分も言葉が出ない。相手の話をよく聞いていないと遊べない。それを、悠実と磨実は、あきもせず繰り返している。

ほるぷ出版のセールスマンが来て、「本が売れないし、ウチの子も、本を読まない。どうしたらいいのだろうか？」と、嘆いた。

「そんなことは簡単です。テレビを消せばいいのです」と夫が教えた。

テレビを見ないと、話す時間がたっぷりあるのだ。

(一九八七年六月記)



ボクってだれ

「ボクには、わからないことがあるんだ。」

いつも思うんだけど『ボクってだれ』なんだろう？」

「ボクちゃんは、池田磨実でしょう」

「それは、名前でしょう。そうじゃあなくて『ボク』って不思議。『ボクってだれ』なの？」

「むずかしい問題を抱えているのね。古代のエジプト人たちや、ローマ人たちも、そのようなことで、いつも論争をしていたんじゃないの？」

「ホントに不思議だよねえ。『ボクってだれ』なんだろう。はて？」

磨実は、腕組みをし、真面目な顔をして、天井を見つめた。

磨実は、小学校一年生。悠実は三年生なのに、二人とも自分のことを「ボク」と言う。

絵本では、男の子の主人公は、すべて「ボク」だ。

女の子は「わたし」「わたくし」ということはなく、「チーちゃん」とか「ノンちゃん」とか、愛称で自分を表現している。

いつの間にか、二人とも、自分のことを『ボク』と言い、それですませている。だれも、やめなさい、直しなさいと言い出さないのです、そのままになっている。

いつまでも、絵本の世界にいていいのだよと思う。

ある日、悠実が友だちの家の誕生パーティーに呼ばれた。

悠実は、ケーキが全部食べられないので、

「『ボク』ケーキ残していいですか？」

と友だちのお母さんに聞いたという。

あらっ、男の子を招いた覚えはないのに、と振り返ると悠実だった。

「悠実ちゃんが、『ボク』と言っているのです、びっくりしたのよ。いつも

そうなの？ お宅は、ユニークな教育をなさっているのね」と、お友だちのお母さんが言った。

ウチは、それほどユニークな教育をしているのだろうか。

「ボク」が、「わたし」になる日、「ボクってだれ」の答えが見えるだろうか。

(一九八七年六月記)



算 数

磨実は、算数の、ある問題ができなかった。

(問) みかんが3つ、りんごが9つあります。合わせていくつでしょう？
「なぜ、できなかったのだろうか？」

「みかんと、りんごは、たせないからだよ。もし、問題が、みかんが3つあります。あとから、みかんを9つ持って来ました。合わせていくつでしょう、だったらできたと思うよ。問題の出し方が、おかしいんだよ。」

たとえば、男の子が、3人います。そこへ、女の子が9人来ました。全部で、何人になったでしょう、という問題も、男と女は、たせないと考える子もいる。その子は、たし算ができないということではなく、男の子と、男の子だったら、できるんだよ」と夫が言う。

問題の方がおかしいから、できないということもあるのだ。

本屋や、文房具屋の店頭には、〇〇三歳児用の知能テストが並んでいる。これをやらせたことがある。すると、面白いことがおきた。

(問) コカコーラの瓶の右側には、何があるでしょう？ 上には、何があるでしょう？

(答) 右には、人形。上には、ボール。

だれにでもできそうな簡単な問題だ。ところが、悠実には、難しかった。

何のことはない。コココーラを飲んだことがないので、どの瓶がコココーラの瓶なのかわからないのだ。右や、上は、わかつているのに。

(問) 次の絵は、どちらがよいでしょう。あなたがよいと思う方に、マルをつけてください。

(答) くま。

でも、悠実は、ねずみと、答えた。なぜ、ねずみなのだろう。

くまの方は、大きなケーキに、大きなまんじゅう。ねずみの方は、小さなケーキに、小さなまんじゅうの絵。

悠実は、ケーキも、まんじゅうも、きらいだった。中耳炎の薬の飲み過ぎと運動不足で、食欲がぜんぜんなかった。なんでも少しにしてくれと言って、少しの方を喜んだ。

だから、小さい方を選んだのだ。

子どもは、だれでも、大きなケーキや、大きなまんじゅうが好きだとは

限らない。

(一九八七年六月記)



諭吉の家訓

『進んでやるのが上の上　まねしてやるのが中の中　言われてやるのが下の下』
(福沢諭吉の家訓より)

夫が気に入って「これを家訓にしよう」と言い出した。大きな紙に書き、壁に貼った。みんなで大声で読んだ。

「ボクなんか、言われてもやらないよ。言われてもやらないのは、ゲゲゲの鬼太郎」
と麿実が言う。

福沢先生が聞いたら泣いてしまう。

英語には有名なことわざ、

『過つはひとのわざ、忘却は神のわざ』
というのがある。

人間は間違いを犯すものだが、神はそれを忘れてくださるという教えた。
夫は、自分でことわざを作った。

『人間であれば、一度のあやまちは起こる。しかし、繰り返しあやまちを
犯すのは愚者である』

みんなで大声で読んだ。娘たちは、「愚者（グシヤ）」という音おんが気に入った。

「愚者ってなあに？」

「あやまちってなあに？」

と、聞く。

夕食の時、磨実が、ぶら下がりにぶら下がった。

「やめなさい。食べ終わってからにしなさい」

と言つても、繰り返すので、

「愚者だよ」

と私が言った。

しばらくして、今度は、悠実が真似をする。

「愚者の真似をする者は、ぐちゃぐちゃである」

と、私が言うのと、磨実も、悠実も、とても気に入って喜んだ。

磨実は、すぐに筆ペンで、大きな紙に『愚者の真似をする者は云々』

と二枚も書き、「どっちがうまく書けたか」と聞いてきた。

(一九八七年七月)



夜のおはなし

夜、寝る前に、夫がお話をする。娘たちは布団の中で、じっとそれを聞く。

今はシートン動物記の『ギザ耳ぼうず』だ。

「お父さんのお話はね、絵を見ているわけじゃあないのに、ボクの頭の中に絵が出てくるよ。白い雪の山とか、オオカミに今にも食べられてしまいそうなウサギとか。大雨と、ものすごい風で、木がゴーゴー鳴っていると。ころとか、寒い谷間とか。

絵を見ていないのに、頭の中に絵が出てくるなんて、不思議なこともあるものだね」

と磨実が言った。

娘たちは、お話を聞くのが大好き。毎晩のお話は、小学校を卒業するまで続いた。

(一九八七年七月記)



先生がね

「先生がね、ばいきんは、自分のお腹を切って、仲間を増やしているんだって」

「体育の時にはくブルマーは、外国のブルーマーという女の人の名前だっ
て」

「ハンカチは、火事の際に、役に立つんだって。濡らして鼻のところをやると、助かるんだって。だから、いつも、ハンカチを持っていなくちゃあ

いけないって」

「先生がね、黒板に問題を書いて『さあやってごらん』と言っても、みんなポカーンと先生を見ているから、先生が『私は、リカちゃん人形じゃありません』て、言うんだよ」

「今日は、世界一大きなアリと、世界一小さなアリを見せてもらったよ」
磨実は、毎日、面白い話を学校から持って帰って来る。ニコニコして、いっしょうけんめい話してくれる。

それを聞くのは、とても楽しい。

「首から上は、全部頭なんだって」

と、先生から聞いた話を磨実が悠実にする。

「それなら、顔っていう漢字は、どうするの。困るじゃないか」

「顔か。困ったな。それなら、顔って漢字は、いらなくなるね」

「それもそうだね。でも、顔がなかったら、おばけ。のっぺらぼうだよ」

「キヤー！ やだよ。トイレにだれかついてって！」

今夜のおかずの名前は、これで決定。「人魂のてんぷら」だ。

こわがりながら楽しむ。

(一九八七年七月記)



玉子焼き

私が、この日記を書いているので、子どもたちが夕食の支度をしてくれることになった。

メニューは、ネギの味噌汁、漬物、キャベツを刻んで、トマトをつけて、玉子焼きを作ることになった。

「玉子は、一人に一個だから、四個だよねエ」

磨実が、冷蔵庫から、玉子を出して、ポウルに割り入れる。

「アッ！ 失敗。もう一個、もう一個」

「お母さん！ マミちゃんはネ、玉子を床に落としたままにしている。いけないよ」

「だって、ポウルに入れようとしたら、外側で割れて出て来ちゃったんだもの」

「磨実！ 濡れ雑巾でふきなさい。かびが生えるよ」

「ヤレバいいんでしょう」

「そう、やればいいんだよ」

と、言いながら、磨実は、ポウルの玉子をかき混ぜている。

「ジャーってフライパンに流すのを、マミちゃんがやりたい」

「いいよ。オッケー。帝国ホテルのナントカって言うのにする？」

「帝国ホテルの玉子焼きだよ」

「それぞれ、それにしよう。すこしたったら火を止めて、掻き回すんだよ」

「ちがうよ。火は、止めないで、周りが固まってきたら、お箸で中を、ぐるぐる混ぜるんだよ」

「そうだったっけ？」

「お箸かして！ もっと、どんどんかき混ぜるんだよ」

「つままないな。ユミちゃんばかりやってて」

「それならいいよ。ママちゃんも、やりなよ」

「もうそのくらいで、フライ返しで巻くんだよ。フライ返し取ってよ」

「お母さん、フライ返し知らない？」

「そんなの、最初から用意してから始めるんだよ」

「アッ。あつたからいいよ」

「よくいったねエ。うまそう」

「おいしい！ お母さんも食べてごらんよ」

「色もいいね。ウン、おいしくできたね。ご飯があと十二分で炊けるから、

ちよっと食べるの待ちなさい。おかずなんだから」

「お父さんに教えてもらった通りやったんだよ。これは、帝国ホテルの玉子焼きなんだって」

「ところで、お父さんは、帝国ホテルに泊まったことがあるのかな？」

「そうだね。行ったことがなければ、帝国ホテルの玉子焼き食べられないものね」

そこに、夫が帰って来た。

「いいにおいだね。子どもたちが、こうして料理を作って、お父さんの帰りを待っていてくれる。なんて、すばらしいんでしょう。こういう日が来るのを、僕は、待ち望んでいたのです」

「教えてもらった帝国ホテルの玉子焼きだよ。食べてごらん」

「お父さんは、帝国ホテルに行ったことがあるの？」

「そんなのないよ」

「じゃあ、なぜ帝国ホテルの玉子焼き知っているのサ」

「困ったな。小学生の時に家にあった『暮らしの手帖』に出ていたんだよ。」

たぶん豪華な物は、みんな帝国ホテルなのさ。別に、帝国ホテルじゃなくて、ホテルニューオータニでも何でもいいんだけど」

「ご飯が炊けるまでに、おかずになるはずだった帝国ホテルの王子焼きは、『オイシイ！ オイシイ！』と、全部食べ終えてしまった。」

（一九八七年七月記）



読書

「お母さん、この本、すごくかわいそうなんだよ。読んであげようか」と、磨実が本を持ってやって来た。

本は、『サーカスのぞう』鶴見正夫作（金の星社）。

木下サーカスの象が、戦争が始まり、動物園にもらわれていく。

だんだん戦争がはげしくなり、食糧がなくなり、他の動物は殺されていく。

園長に守られた二匹の象は、生き残る……。

「なんて、かわいそうな動物たちなんだろう。戦争がなければ、殺されなくてすんだのにね」

と言って、ポロリと、涙を流した。

幼稚園の時、影絵の「角笛シルエット劇場」が、小田原市民会館に来た。やなせたかし作『やさしいライオン』をやった。ライオンが犬を助ける話。ライオンは、やさしいライオンで、悪いことは何もしないのに、人は、ライオンと聞いただけで、銃で撃ち殺してしまおうとする。

クライマックスで、やさしいライオンは、人には理解されず殺されてしまった。

磨実が、泣きながら見ていたので、私も磨実も、びっくりしてしまった。

「かわいいそうだったね」

と言いながら、腕で涙をぬぐっていた。

家に帰ってすぐに団員の人に手紙を書いた。

後日、絵はがきで返事がきた。

「こんなに真剣に見てくれて、うれしいです。感じる心がたくさんあって、磨実さんは、すばらしいです。また、会えるといいですね」

悠実は、同時にやった『ももたろう』で、桃太郎が、みやげに持って帰って来たのが鬼の角だったのが面白かったと、書いて送った。

「悠実さんは、よく見ていましたね」という返事がきた。

団員の人も、うれしかったと思うけれども、娘たちも、とてもうれしかった。

そのチケットは、幼稚園で販売したのに、他に、だれも行かなかったのは残念だった。美しい画面だった。

夏休みに入つて、また磨実が本を持って来た。

「お母さん、この本すごくかわいそうなんだよ。立ったまま死んじゃう人がいたり、火の中で切腹したり、かわいそうで、かわいそうで読んでられないよ」

と言う。

振り返ると、目が真っ赤で、泣いたので鼻水が出ている。

本は、学研マンガの『武蔵坊弁慶』だった。

立ったまま死んだのは弁慶で、火の中で切腹したのは、源義経。

本を読んで感動するのはすごい。

命の大切さを教えてくれたのだから、マンガもバカにならない。テレビをほとんど見ないので、感動も大きく、泣けるのだろう。



海水浴

小田原の御幸ヶ浜^{みゆき}に、泳ぎに行った。

海岸に着くと、そこはもう別世界だった。

キラキラ照りつける太陽。焼けた砂浜。ムツとする海岸特有の匂い。ビーチパラソルが立ち並び、水着姿の男や女。子どもの歓声を打ち消す波の音。海の色。

浜一面に人が群れているのに、だれ一人として知った顔がないのは、不思議なことだった。

「お母さん、ここが空いているよ」

磨実が、指差す一角を見ると、まるで用意してあったかのように空いて

いた。

さつそく、靴を脱いで水着に着替えた。

二人とも、泳ぎたい一心で「早く、早く」を連発した。

二つの浮き輪に空気を入れると、へとへとになってしまった。

それを持って、二人は元気いっぱい海に入ってしまった。

去年は、初めての海で、入ったとたん、波がドツと来て、頭から海水をかぶり、泣いたのに。

「ちよっと待ちなさい！」

と言う私の声も聞かずに、どんどん入って行った。

「ワー！ 気持ちがいい。ウヒャー！ お母さんも、おいでヨー！ 早く、早く！」

「泳げないんだから、足の立たない所へ行ったら駄目よオ！ そんなに深い方は、ダメダメ！ ウワツ！ 大きい波が来たヨ。キヤーツ！ 磨実、

悠実、大丈夫か？ 浮き輪に、しっかりつかまっていなさい。放したら、死ぬよ！」

しばらくすると、

「ユミちゃんと、泳いで来るから、お母さんは、もういいよ。上がっていいよ」

と磨実が言う。

「そうかい。いいのかい。大丈夫かい？」

私は、浜に上がり、寝そべって娘たちを眺めたり写真を撮ったりした。

二人は、沖の方まで行って、手をふっているかと思うと、磨実だけ、左の方にどんどん流されて、大波にザンバとのまれ、浮き輪からはずれて、上がって来なかったりして、慌てた。

この時は、周りにいた人々もびっくりして、「だいじょうぶかい？」と

磨実に声をかけたようで、磨実は知らない男の人に声をかけられた方が、怖かったようだ。

ひと泳ぎして、浜に上がり、きれいな石を探したり、お茶を飲んだりして、休んだ。

ウインドサーフィンをしている人が、三、四人いた。

「アッ！ またひっくり返った。今度は、なかなか起きられない。平気かなア？」

「赤いヨットの人は、へただねエ」

「お父さんも、来るとよかったのにね」

「お父さんは、ボクたちには『勉強したらだめ！』って言って、自分ばかり、勉強しているもんね」

「海も『行ったらだめ！』って言ってたね」

夫が「海に行ったらいけない」と言ったのには、理由があった。海で亡くなった人がたくさんいるからだ。

しばらくして、子どもたちは、私を置いて、また、海に入ってしまった。

「お母さんは、もういいよ。ここで見ていなよ」

私は、そうすることにした。

波が来るたびに、キヤー、キヤーと言っていたので、喉が痛くなった。

ほんやりと、あたりを眺めて仰天した。

今いる一角が、なぜ空いていたのかが、その時わかった。私たちの後ろには、なんと安部譲二の世界が広がっていた。中央の、ビーチパラソルの下に、ボスらしき男が寝そべっていた。その周りに、入れ墨をした男たちや、髪を黄色に染めた女たちがたむろして、コーラを飲んだり、かき氷を食べたり、オイルを塗りあつたりしていた。

なかの一人が立ち上がり、海に入ってしまった。背中には、ボタンの花の

入れ墨がしてあった。その男は、抜き手を切つて沖に泳ぎ出て、また、さつそうと、抜き手を切つて泳いで戻つて来た。そしてブルン、ブルンと、体をゆすつて、水しぶきを切つて見せた。

浮き輪や、ビーチボールに、つかまつて浮いている人ばかりのなかで、その入れ墨男は、目立つて、人々の注目の的となつた。

「入れ墨をすると、あんなにうまく泳げるようになるの？」
と磨実が言つと、

「入れ墨は、体に彫るんだから、血が出て、うんと痛いんだよ」
と悠実が言つので、磨実は、

「へー！」
と言つたきり言葉がなかつた。そして、その入れ墨を、よくよく見た。

傍に、三歳ぐらいの女の子が来た。大声で何か言つた。すぐに若いお父さんが飛んで来て、

「指なんかさすんじゃない！」

と言つて、抱きかかえて、連れて行つてしまった。

私が小さいころ、小田急線の新松田駅にたむろしている、白いスーツの男たちがいた。

「あっちを見るんじゃないよ」

と母に言われて、どこを見ていたらいいのか、わけもわからず、怖い思いをしたことがあつた。

その面々は、悪いことをするでもなく、海辺を楽しみ、私たちより先に、引き上げて行つてしまった。

娘たちは、もう少し、もう少しと、なかなか上がろうとしなかつた。

この日のことは、よほど楽しかったとみえて、ことあるごとに、話題に

なった。「いい夏休みだったね。楽しい海だったね。また行きたいね」と。

後日、写真ができ上がった。

磨実と悠実が、Vサインを出してニッコリしている前を、ピンクのパンツの入れ墨男が、横切っていた。

(一九八七年八月記)



ごちそうさま

私は、結婚をするまで、ほとんど外食をしなかった。

夫と外食をして、ある日、妙なことに気がついた。毎回、食べ終わった後、夫はていねいに「ごちそうさまでした」と言っている。自分のお金で

食べたのだし、店の人はそれが仕事なのにと、私には不思議だった。

ところが、しばらくすると、私も「ごちそうさま」と言つて出るようになった。別に、夫が言えと言つたわけではないのに。店の人も温かく触れあえ、そのことで、心までも楽しい気分でいっぱいになった。

娘が生まれた。外食をして、私たちは、やはり立つ時に「ごちそうさまでした」と言つていた。

今日気がついたのだが、料理屋を出る時、悠実も磨実も、大声で、

「ごちそうさま。ああ、おいしかった」

と言つた。それを聞いた店員さんが、

「ハイ！ また来てね。おりこうさんね」

と言つて笑つた。

『ごちそうさま』は、人に感謝をする言葉だ。その気持ちがあつても、表現しなければ、わかつてもらえない。

親が、教えたわけではないのに、娘たちが自然に覚えた礼儀作法だ。

よいことは、真似てもらいたい。

感謝されることは、うれしいに決まっている。

(一九八七年九月記)



テスト

悠実が小学校一年の時の理科のテストの問題。

(問題) 一本のアサガオは、いくつの種から育ちますか？

(悠実の答) 五粒

もちろんバツ！

なぜ、この問題ができなかったのだろう。こんな考えだった。

「ボクは、学校で、自分の鉢に五粒のアサガオの種を蒔いた。そこからは、

一本のアサガオの芽しか出なかった」

この発想は、エジソンのようだ。

二年後の今日。今度は、磨実がこれと同じ問題で、やはり五粒と答えて
バツをもらって来た。

エジソンが二人になった。

(一九八七年十月記)



㊦工の楽しみ

その一 発想を変えよう

毎年、近くの第一生命が主催する絵の展覧会を見に行く。

幼稚園児の作品は、なぐり描きのものばかりだ。小学生の作品は、エンピツや、黒のクレヨンで形を取り、それに色が塗ってある。大人が手伝ったと、すぐわかるものも多い。

朝、幼稚園の送迎バスの所で、お母さんたちが、「みんな、じょうずだったわね」と言っていた。

どの絵を見たのだろう。

松本キミ子という人がいる。

一般的に美術教育においては、絵はのびのびと自由に描くのがいいときられている。しかし、絵は自由に描けばいいものではない。絵には、描き方がある。

どんな学問にも芸術にも方法がある。絵の描き方だけに方法がなくて、自由に描けばいいというのは、おかしい。絵だって、教えられるものなの

だ。

色は、もともと三原色と白でできている。三原色と白を混ぜ、すべての色を作りながら描く。

一般に絵は、全体のスケッチをしてから描く方法が定着している。この方法だと、センスのある子しかうまく描けない。うまくデッサンできることが、絵のセンスだと思われる。

しかし、そんなことはない。発想を変えよう。

絵は、部分から完成させて行く。ワク取りはしない。画用紙からはみ出しそうになったら、紙をたせばいい。画用紙のはじっこに小さく描けてしまったら、画用紙を切れればいいのだ。誰にでも絵は描けるし、絵を描くことは楽しい。

この方法は、『キミ子方式』と呼ばれ、現在広がりつつある。

ところで、その松本キミ子先生が、藤沢での描き方講座でされた話。

キミ子先生の息子が、学校で出された問題ができなかったのだという。

「五羽の鶏がいて、そのうちの三羽に色を塗りましょう」というのだ。

こんな問題ができないなんてと、キミ子先生は、カッとなつてしまったそう。息子をぶつた。叱つた。ところが、よく聞いてみると、息子は、こう言ったのだ。

「鶏は白だから、色なんか塗つたらおかしいよ」と。

それで、キミ子さんは、ハッとしました。

この話を聞いて、私は大笑いしてしまった。なぜなら、似たようなことがあつたからだ。

悠実が三歳の時、小田原のあるビルで、幼児の英才教育塾をやつていた。ちよつとやつて見ませんか？ と、誘いを受けて入つてみた。

「野球のボールに好きな色を塗りましょう」という課題だった。

みんなは、すぐに赤や黄色や、青のクレヨンで塗りだした。

悠実は、何色で塗つたか？ 悠実は、白で塗つた。他に白で塗つた子は、

だれもいなかった。

「どうして白なのかな？」

と先生が聞くと、こう答えた。

「だって、ボールは白だもの」

その二 毛糸の帽子を描く

藤沢のキミ子方式の描き方講座から帰ると、子どもたちは、もう一度、『毛糸の帽子』を描きたがった。こんなことは、初めてのことだ。家には毛糸の帽子がなかった。小田原に買いに行った。

夏なので、スポーツ店にも、どのデパートにもなかった。

最後に、小田原で一番大きなデパートの帽子売り場に行った。

「今は、毛糸の帽子は、置いてありません。麦わら帽子ならあります。今時分、毛糸の帽子なんて、外国の山にでも行かれるのですか？」

「絵を描くモデルに使うのです」

と私が言うと

「ああ、夏休みの自由研究の絵なの？ それだったら奥さんが、描いてやっちゃったら？ 私なんかいつもそうだったわよ。わからないわよ。平気よ」

「でも、本人がモデルにさわったり、しっかり見て描かないと……」

「大丈夫よ。麦わら帽子だっていいじゃあないの。ほら、ここが、編み始めだから、ここから順に、ぐるぐるっと回って点、点、点。とか、バツ、バツ、バツ、とか、編み目みたいにして、だいたい描いてっちゃうのよ」
私は、言葉がなかった。家に帰って、夫に話した。

「キミ子先生と同じように、帽子の描き方を売店のおばちゃんが説明した」
すると、夫はこう答えた。

「たまたま帽子は、同じ描き方の説明ができたけど、『もやし』や『空』
『すいか』は、どうなんだ？ 聞いてみたのかい？」

「……」

その三 ヒヤシンスの水栽培を描く

磨実が幼稚園の時、園から帰ると、手帳を見せてくれた。

「ヒヤシンスの絵を描きました。キミ子方式で描いて、とてもきれいに描きました」と書いてあった。

「磨実ちゃん、ヒヤシンスの水栽培を、見て描いたの？」

「うん。幼稚園で、育てているんだよ。花が咲いたんだよ」

「三原色と白の絵の具。それに、0号の筆を全員に先生が貸してくださいましたの？ よくそんなにたくさんあったね」

「絵の具で描いたんじゃないよ、クレヨンだよ」

「あれ？ じゃあ、どの順に描いたの？」

「根を描いて、それから茎、葉、花だよ」

「紙がたりなくなつて、付け足してもらつて、大きな、大きなヒヤシンスになつた子もいたでしょう」

「紙は、いつもの白いので、一人一枚だよ」

「あれ？　じゃあ、はみ出した子もいるんだ」

「はみ出したりなんかしないよ。その紙に全部はいるように描くんだよ」

「水栽培のヒヤシンスというと、もしかして、球根の所から下、根はガラスのコップに、水が入っているのを見て描いたの？」

「うん。そうだよ」

「あれ？　あれ？　……」

キミ子方式で、キミ子先生が一番困ったのは、形を取らないで、どうやって、コップに入った水を描くかだった。

持ち帰った絵は、いつものと変わりなく、なぐり描きで、へただった。

それからすぐに卒園してしまったので、もう一度、本当のキミ子方式で、ヒヤシンスの水栽培の絵を描くことはなかった。

麿実が卒園して二年後の四月、キミ子先生が、新しくできた大井町中央

公民館に来て、『毛糸の帽子』と『ペンペン草』の描き方の指導をしてくださった。

残念なことに、磨実の幼稚園の先生は、だれも出席していなかった。

その四 キリンを描く

磨実は、絵を描くのが大好きだ。ある日「キリンと一緒に描こう」と言う。

「キリンなんて、お母さんは、むずかしくて描けないよ。お母さんが、絵がへたなこと、知っているでしょう？」

「教えてやるから描こうよ」

もう、画用紙とマジックを用意している。

私が、描いたのを見て

「こりゃあ、ブタキリンじゃあないの。ほんとのキリンの絵を見ながら描けばいい」

絵本のキリンを持って来た。そして、磨実は、別の白い紙で、キリンの顔以外の所を、見えなくした。

「まず、顔を描いて、ハイ。できたら、首を描いて、ハイ……」
と白い紙を次々ずらして行く。

途中で、描いている方の紙がたりなくなって、セロテープで裏打ちして紙をたした。

最後に、しっぽを描いてでき上がった。

「順々にちよつとずつ描けば、お母さんにも描けるでしょ？」

「ほんとだね。マミちゃんは、いつも、こうやって絵を描いていたんだ。偉いものだね」

いざ、キリンを描こうと意気込んで、全体を見てしまう。すると、あつちも、こつちも描こうとして、結局ブタキリンになってしまう。

キミ子先生に、絵を教えてもらったわけではないのに、絵を描くコツを知っていた。

この時、磨実はまだ、幼稚園に入園していなかった。

その五 おばけを描く

幼稚園に入園すると、磨実は、コアラの絵や、マンガのヒーローの絵をみんなに描いてやった。

家で、お化けの絵を描いて持つて行くと、みんなが描いてもらいたがって、紙を持って、磨実の周りに列ができた。そのうち、他の子も、お化けを描き始めた。だんだん園内がお化け屋敷になった。ごちゃごちゃした物をぶら下げたり、罫いを作って暗くしたりした。そして、その中で、給食を食べたり……と、なった。

磨実のお化けの絵から、どんどん発展して、楽しいお化けの幼稚園になった。

夜遅くまで絵を描いていたため、風邪をひき休園をした。

風邪はなかなか治らなくて、一週間も、続けて休むことになってしまった。磨実は、寝ていられなくて、私の目を盗んでは、お化けの絵をせっせと描いた。

「مامিちゃん。お化けが好きなの？」

「うん。大好きさ。お化けが家にも来るといいなあ。一匹ほしいなあ」

熱は、なかなか下がらなくて、だんだんイライラしてきた私は、

「そんなにお化けの絵ばかり描いているから、熱が下がらないんだよ。今に死んじゃうよ。مامিちゃんだけ、一人でお墓に入るんだよ」と言ってしまった。

しばらくして行ってみると、変な物が山ほどできていた。折紙を半分に折って、真ん中に糸を通して吊るすようになっていた。それにマジックで、豚や、魚、猫、犬、兎、馬、ペンギンなどの絵が描いてあった。

それは絵馬だった。早く風邪が治るようにと思っただろう。それに、私に叱られて、死んだら困るなど考えてのことらしい。

驚いたことに、中心部を吊るすようにしたのは、私の針箱の中の針と糸を使つてのことだった。

(一九八七年十一月記)



サーカス

その一 うれしいサーカス

勤労感謝の日、『キグレ大サーカス』を見に、平塚市に行った。

娘たちは、東海道線に乗るのは初めてで、海が見え隠れしたり、みかんがたわわに実っているのに、歓声をあげた。

駅から少し歩いて行くと、サーカスのテントが見えた。みんなが、それに向かつて、浮き浮きしながら歩いている。どんどん足ばやになる。

「どんなのやるかな？ ワクワク、ワクワク」

と麿実が、アラレちゃんのようにしてふざける。悠実も、興奮している。

連休なので、一日三回、満員御礼のようだ。

大きなテントの中は、ロック調の音楽が、ガンガン鳴り響く。

派手な衣装の男や女の空中アクロバット。一輪車、オートバイショー。

手に汗握る演技。まるで自分がやっているように緊張したり、ほっとしたりする。

「じょうずね」

「すごい、すごい」

を連発し、一つの演技が終わるごとに拍手をして応援した。楽しく、サーカスと一体となった。

動物ショーもあった。

神経質そうな犬が、スカートをはき、後足で立ってハードルを跳び越えた。

猿が、〇脚に長靴をはかせられて出てきて、玉乗り、自転車乗りをした。アシカが輪投げをした。象が、平均台の上を歩き、最後に、もたもたしていたので、鞭が飛んだ。

娘たちは、笑いながら、手を叩いて、

「かわいい。よくあんなことができるね」と言ってみていた。

私は、無理にやらされている動物たちがかわいそうで、涙が止まらなかった。娘たちのバッグから、ティッシュを借り、鼻をかんだ。

それを見て、二人が言った。

「みつともないな。お母さんは」

「今度から、連れて来ないから」

トランポリン・ショーでは、観客席から一緒にトランポリンをやるお父さんと、お兄さんをつのつた。

悠実は、小田原に来た『ホリデイ・イン・サーカス』の時、トランポリンに出て、サーカスのお兄さんやお姉さんとやったことがあったけれど、今回は、マイクで、

「お父さん一人と、お兄さん一人にやってもらいます」と言ったので、出られなかった。

最初に出たお父さんは、トランポリンに上ると、すぐにバランスを崩した。立っていられなかった。そのおかしな姿に、観客は爆笑だった。

次に、お兄さんが出て来た。私たちのすぐ後ろにいたお母さんたちが、「あれは、サクラじゃない？ きっと、サーカスの人よ」と言っているのが聞こえた。

よく見ていると、前のお父さんのように、大勢で押さえてやっていない。サーカスの人たちが、手かげんしていないようだった。

お兄さんは、トランポリンの中で、転んだり、まわりの網に、頭がはさまったりして、おかしなかつこうでもがいた。娘たちは、大笑いし、

「お兄さんは、へただね」

と言つて喜んだ。

最後に、空中ブランコがあった。何といつても、サーカスの花だ。胸がすく思いだった。

曆実は、この空中ブランコのことを、日記に、六ページに渡つて書いた。後日、その日記は、クラスの前で、ほめられたという。

「お母さんも、空中ブランコに出てみたいな。あんなちっちゃなパンティーはいて、受けとめてもらいたいな」

と言つと、

「ムリ、ムリ。また、お母さんの病気が出ちゃつてさ。すぐに変になつちやうんだから。何を考へてるんだらうね」

と二人が口をそろえて言った。

帰りの電車の中では、思い思いに楽しかったことを話した。サーカスを見るのができて、幸せだった。

その二 悲しいサーカス

私が、六歳ぐらいの時、隣の町に、小さなサーカスが来た。

「空中ブランコ」や「綱渡り」は、もちろんあった。「小人のボクシング」というのもやった。

大人の顔をしているのに、その人たち三人の小人は、六歳の私ぐらいの大きさだった。ピエロに扮していた。あとから普通の大人のピエロも出て来た。

大人のピエロはボクシングのグローブで、小人のピエロを、めちゃくちゃになぐった。小人は、直立したまま、前や後ろにデーンと倒れた。

それを見て、みんな手を叩いて喜び、

「いいぞ！ もっとやれ！」

と、野次を飛ばした。

私にはかわいそうに思え、笑えなかった。

小学校三年生の時、『ポリシヨイ・サーカス』を見に、秋葉原まで連れて行ってもらったことがあった。しかし、華やかであっただろう内容はぜんぜん覚えていないで、「小人のボクシング」ばかり覚えている。

母は、この時、どんなことを私に言ったのだろうか。

その三 サークスは、みんなで

サーカスが来るたびに、私は、勇んで娘たちを連れて見に行く。

『アメリカン大サーカス』『フランス・サーカス』『リング・リング・サーカス』。向ヶ丘遊園に『ホリデイ・イン・サーカス』と、どこにでも。

向ヶ丘遊園の時は、その日の観客のほとんどが身体障害者だった。その

ことに気がついたのは、サーカスが始まって、しばらくしてからだった。

悠実の隣には、車椅子の人。磨実の隣には、頭にヘルメットをした人がいた。足や手が不自由な人も、楽しそうにサーカスを見ていた。私は胸が熱くなった。

サーカスが終わると、ボランティアの人に付き添われて、バスに乗って帰って行った。

サーカスは、夢をふくらませ、胸をはずませ、幸せにしてくれる。

「お母さんは、いつも、サーカスに連れて行ってくれたね。楽しかったね」と、大人になった娘たちは、言ってくれる。

私は、サーカスが、大好きです。私が見たいので、娘たちも一緒に連れて行くのです。サーカスは、みんなでワイワイ言いながら見るものです。

私の親がしてくれたことを私も、娘たちにしてやるのです。



講 話

「朝会で、校長先生が話すことは、ためになるよ」

「どんな話？」

「自転車は、交通事故を起こしやすいから、気をつけて乗るようにとかだよ」

「そう。悠実は、話をよく聞いているんだね」

こんな真面目な正しい生徒がいることを、校長先生は、御存知だろうか。母親の私だって、同じことをいつも言っているのだけれど。

三学期の最初の朝会で、悠実が校長先生にほめられたという。

「二学期の終業式の日、何か話しましたね。覚えてる人いますか？」
磨実が手を上げた。

「『お年玉で、一冊でも、本を買って読むように』と、言われました」

磨実は、体育館のステージの下へ行き、マイクを使って答えた。

「偉いですね。よく覚えていました。みんなの中で、本を買った人いますか？」

この話は、ピアノ教室の生徒の何人かから聞いた。磨実の口から聞いたのは、ずっと後になってからで、その度胸のよさに感心した。

「ボクは、マイク持たされて、ホント恥ずかしかった」と言っていた。

我が家には、真面目な生徒が二人もいる。

（一九八七年十二月記）



買えないもの

正月が明けると、磨実も悠実も小学生なのに、いただいたお年玉は七千円にもなった。友だちは、三万円とか、十万円だというので驚く。働いてもない子どもに、必要のないお金を持たせて、いいわけがない。

三月に入り、子どもたちの間で、ビックリマンシールの売買が問題になり、大人たちは慌てた。親たちは、なんと行って、多額のお金を子どもに渡したのだろう。どんな顔で、お金の使い道を問いただしたのだろう。

お金を持たなければ、売買事件は起きなかった。反省すべきなのは、お金を渡すことによって、子どもに好かれようとする大人だ。

大人が欲しがっている『優しさ・思いやり・愛情』は、お金では買えない。

それは、自分で時間をかけて育てるものだ。

(一九八八年三月記)



女子高生

肩より長い髪の毛に、大きな白いリボンをつけている。制服のひだのスカートのを引きずっている。黒いズックのかかとを踏んでいる。ペタンコのバッグを持っているが、教科書は入っていない。カミソリの刃を持っていたりする。

三歳の磨実と五歳の悠実を連れて小田原へ行った時のこと。

ペコちゃん、ポコちゃんのイラストのついた赤いバッグが、可愛くて、

買って持たせた。娘たちは、とても喜んだ。

「お母さんありがとう。お母さん大好き」

と、口々にお礼を言った。

小田原駅には、昼間なのに女子高生がたむろしていた。

突然、悠実が、ペコちゃんバッグを持っている女子高生を発見した。

「あたしたちのと、おなじ！」と言って指をさした。

「おなじ！ おなじ！」

磨実も言いながら元気に悠実の後に続いた。

二人は、ペコちゃんバッグを高々と上げたりして、スキップで女子高生の回りを回った。

「なんだ。こいつら」と言いながら、女子高生は行ってしまった。

私買ってやった物を、娘たちがこんなに喜んでくれたことが、とてもうれしかった。

帰りは、御殿場線で帰った。

その車両には、私たちしか乗っていないなかった。電車が駅に停車しても、だれも乗車して来なかった。車内には、ひんやりとした静けさがあった。

「良い一日でしたねえ」と私が言うと、

「良い一日でしたねえ」と悠実が真似をして言った。

「ヨイ！」と磨実も、元気に真似をして叫んだ。

みんなで、顔を見合わせて笑った。

(一九九九年記)



サワー

悠実が六歳、磨実が四歳。久しぶりに外食をした。

「自分で食べたい物を注文しなさい」

と私が言うのと、壁にはつてあるお品書きを見ながら、悠実が叫んだ。

「レモンサワーと、ウメキュー」

続いて磨実も元気に注文した。

「メロンサワーとモロキュー」

「あとは、おにぎりと冷ややっこ。それでお願いします」

「ご注文を繰り返します。……で、よろしいでしょうか」

すぐに、アルバイト風の青年がもどつて来た。

「申し訳ございませんが、サワーは、お酒なのでお出しできません」

「サワーってお酒なんだ!？」

そこは、居酒屋だった。六歳と四歳の子どもから、サワーの注文を受けた青年は、厨房で、腹を抱えて笑ったことだろう。

ウメキューとモロキューが美味しかったので、帰宅してから三人で作った。それは、簡単に作れる料理だったので、毎日食卓に並び、池田家のごちそうメニューになった。

(一九九九年記)



コンピュータゲーム

小学校三年生の悠実が、友だちの家から帰って来た。目がトロンとして、話をしない。体からエネルギーが抜けてしまっているようだ。どうしたのだろうか。

しばらくすると回復し、いつものように元気に食事をした。

次の日、小学校一年生の磨実が、同じ友だちの家に遊びに行き、帰ってくると、同じように元気をなくして、座り込んでいる。こちらは、重症で、「ご飯はいらない。すぐ寝る」と言って寝てしまった。

娘たちから遊びの様子を聞いた。コンピュータゲームをして遊んだの

だ。

「どちらかが、死ぬまで戦うんだよ。だいたい私が負けるから、また、最初からやり直して、相手を倒すまでずっとやるんだよ」

「知らない間に、画面の中に自分が入って殺し合っていたりするんだよ。すごいよ。機関銃や、爆発の音や、死んだ時の音が、頭に残っているよ。怖くって、すごいよ」

説明をしながら興奮している。

マーケットで、娘たちが遊びに行った友だちのお母さんに会った。

「いつも、二人が遊ばせていただき、ありがとうございます」

「ゲームは、とてもいいのよ。集中力がつくし、思考力や瞬発力も身につくから、ゲームソフトをたくさん買い与えているのよ。家でやっているから、交通事故や誘拐の心配もないし、一石二鳥よ。よかったら、毎日でも来て遊んでね。ウチは、かまわないから」

その友だちが、私のピアノ教室にレッスンに来た。

姉が小学三年生で、妹が小学一年生だ。

姉は小学三年生と思えない、甘えた話しかたの子だった。すぐにアクビをして、話を聞いていられない。椅子に座っているのがやっとなほど疲れでいて、ピアノを弾く気力がまったく出ない。

「何かを考えようとしても、考えがまとまらない。勉強も、しようと思っけれど、やる気が出ない。家庭教師のお姉さんとも、ゲームで遊ぶんだよ」
その姉はピアノ教室をすぐにやめた。

次に、妹が来た。お母さんが、

「この子の方がいいと思います」
と、言った。

妹も、疲れていた。

「目が痛い。頭がぼんやりする。夜、ずっとゲームをやっているから、寝ていない」と言い続けた。

「お母さんは、そのことを知っているのかな？」

「知っているかどうかわからない。でも、言うとは叱られそう」

「……」

妹もピアノ教室をすぐやめた。

二人とも体は大きいのが、話す態度や意見は、小学生とは思えないほど幼稚だった。

新学期がきてクラスが変わると、娘たちは、その友だちの家に遊びに行かなくなった。

(一九九九年記)



仲良し

小学校の修学旅行は、日光だ。

悠実が修学旅行に出かけた翌朝、磨実が聞いた。

「ユミちゃんは？」

「日光に行ったよ」

「ああ、そうか」

二年後。

磨実が修学旅行に出かけた翌朝、悠実が聞いた。

「ママ君は？」

「日光に行ったよ」

「ああ、そうか」

予想通りだった。姉妹は互いに思いやり、心配していた。

私は、母として、それがとても嬉しかった。

(一九九九年記)